

強迫性障害の動物モデルであるマーブル・ベーリング行動に関する研究

松下 満彦¹⁾, 江頭 伸昭²⁾, 奥野 良子²⁾,
原田 聡子²⁾, 塚田 淳也¹⁾, 清原 義明¹⁾,
千鳥 正三¹⁾, 内田 直樹¹⁾, 三島 健一²⁾,
岩崎 克典²⁾, 藤原 道弘²⁾, 西村 良二¹⁾

¹⁾ 福岡大学医学部精神医学教室

²⁾ 福岡大学薬学部臨床疾患薬理学教室

要旨：今回我々は、強迫性障害（OCD）の評価系であるマーブル・ベーリング行動試験について検討した。5-HT_{1A} 受容体完全作動薬である 8-OH-DPAT は、3 mg/kg (i.p.) の用量で全運動量を低下させることなくマーブル・ベーリング行動を有意に抑制した。同様に、fluvoxamine (30, 60 mg/kg, p.o.), paroxetine (1, 3 mg/kg, p.o.), および、milnacipran (60 mg/kg, p.o.) も全運動量を低下させることなくマーブル・ベーリング行動を有意に抑制した。これらのうち、8-OH-DPAT および paroxetine のマーブル・ベーリング行動抑制作用は、WAY-100635 (3 mg/kg, i.p.) によって拮抗された。また、haloperidol (0.1 mg/kg, i.p.) はマーブル・ベーリング行動を抑制したが、同用量で、運動量の低下とロタロッド試験における協調運動障害が観察された。ところが、運動量に影響せず、単独では効果がない低用量の haloperidol と、同じく単独では効果がない低用量の fluvoxamine を併用したところ、これらの組み合わせは全運動量に影響せず、有意にマーブル・ベーリング行動を抑制した。抗精神病薬と SSRI の併用は、お互いにそれぞれの効果を高めあうことで、治療抵抗性の OCD に対する強化療法となりうる可能性が示された。

キーワード：マーブル・ベーリング行動, 強迫性障害, **Fluvoxamine**, **Paroxetine**, **Milnacipran**, **haloperidol**, セロトニン 1A (5-HT_{1A}) 受容体